

Y04c マルチメディアソフト『宇宙スペクトル博物館 可視光編』改訂版の紹介

粟野 諭美（岡山天文博物館）、加藤 賢一（大阪市立科学館）、田島 由起子（サイエンスデザイナー）、田鍋 和仁（ミノルタプラネタリウム）、乗本 祐慈、前原 英夫（国立天文台岡山）、福江 純（大阪教育大教育）

本シリーズのはじまりは、3年前にさかのぼる。初版『宇宙スペクトル博物館 虹からキューサーまで』は、国立天文台の共同開発経費の援助のもと1998年春に完成し、研究者をはじめ教育関係者など多くのみなさんの好評を得た。その後、『X線編』、『電波編』と異なる波長で見た宇宙の姿を紹介した同シリーズが豪華房より刊行され、この秋、フィナーレを飾る『可視光編（改訂版）』が刊行される運びとなった。もっとも量的には初版（200MB）の3倍以上に増え、改訂版というよりほとんど新作に近いものとなっている。

今回の可視光編は、「可視光・近赤外で見た宇宙」をテーマに、スペクトルはもちろん、美しい撮像画像や測光データなど、可視光・近赤外を通じて見られる宇宙のさまざまな現象や、日本の可視光・近赤外での観測の成果を十二分に紹介することを目的としている。

全体の構成は、スペクトルと色、身のまわりの世界、実験室、観測装置、太陽と太陽系系、星と連星、銀河系、銀河など、全10セクションから成り立っており、どこからでも自由に学べるようになっている。本ソフトはHTMLで記述され、ブラウザを利用して初心者の一人学習が可能であるとともに、専門家の一般講演などでのプレゼンテーション資料としても十分活用できるものと考えている。

本シリーズは、多くのみなさんからのデータ提供とご協力によって完成させることができた。本会では、みなさんへの感謝の気持ちを述べるとともに、今後の改良のためにも、幅広いご意見をいただけることを期待している。